

# 生活科に関する研究

—幼稚園教育と小学校教育との関連のために—

山口大学教育学部附属幼稚園

池田理映

## 〈はじめに〉

今回の教育課程の改訂は、幼稚園から高等学校までを一貫して考えられていることが、大きな特徴であると言われている。それぞれの発達に即した教育とその連続性が重視され、小学校においては、今まで軽視されていた遊びを学習として認め、具体的な活動や体験を通しての総合的な指導をするという、生活科が新設された。生活科は、幼稚園教育と小学校教育との関連という面においても大きくクローズアップされている。

幼稚園と小学校は、子どもにとっては連続線上にある。また年長児と小学校低学年児童は、発達的にもおなじようなレベルにあると言われる。その中で、子ども自身が自分の足で幼稚園から小学校への階段を、溝を感じずに登っていけるような接続性や関連性を持たせることは以前から課題とされてきたところである。そして今、生活科が新設され、その目標や内容の間には十分に関連性が考慮されているように見える。しかし、実際に行なわれている生活科の授業の実践は幼児教育を知らない小学校の教師が力説するほど、十分な関連性が考慮されているとは言えない現状である。

そこで、生活科について、逆に幼稚園の立場から関連の方向を探り、幼稚園教育と小学校教育のスムーズな接続・関連を検討する。

## 研究方法

平成元年度、2年度の山口大学教育学部附属幼稚園での保育の記録の中から、生活科の授業でも教材として使われるであろうものを使って遊んでいる場面を取出し、生活科との関連を考察する。

### 1. 幼稚園教育と生活科

新設教科である生活科を考えると、現実として小学校では、その目標や内容、またそれに伴っての指導計画などについて、多くの時間を費やして考えがちである。他の教科とは違った性格をもつものとして新設された生活科を実際の授業でどう仕組めばよいのかといった教師のとまどいや不安が現れた結果であろう。しかし、初めからあまりに具体的場面や方法を考え過ぎているため、かえって今までの教科の枠、指導の仕方の枠を越えられず、国語や算数とかわらない「生活科」となっているのではないだろうか。それよりもまず、どうして生活科が生まれてきたのか、その新設までの経緯を知ることこそ、発想の転換を求められている教科として、どこに注目し、何を大切にしていけば良いのかが理解できると考える。

生活科が生まれた背景として次の4点を把握している。

1つ目は、思考と活動が未分化であるという発達課題をとらえた上で、具体的な活動や体験を重んじる指導が十分にできる教科が必要であるということである。つまり、低学年児童の発達特性に適合した教育活動として、生活科が生まれてきたということである。

2つ目には、幼稚園教育と小学校教育の接続・発展を図ることが大切であるということである。現在、幼稚園教育と小学校教育の間には、大きな溝があると言わねばなるまい。子どもにとっては連続したものであるのに、幼稚園、小学校と器がかわただけで、一番大切に考えられるべき子どもの生活や育ちまで、器にあわせて無理にかえてしまおうとしている。幼稚園では遊びが子どもの生活そのものである。その中で、子どもたちは総合的に多くのことを学んでいく。この連続としての小学校低学年にも、遊びが学習であるといった教科をつくり、両者の断絶をうめようというものである。

3つ目には、今日の児童の実態への対応、つまり、自然ばなれや日常生活に必要な生活習慣や生活技能の不足という状況にある子どもたちに対応すべきものとして生まれてきたということである。

最後に、これまでの低学年の社会科・理科の学習指導に対する反省にあるといえる。社会科・理科には、ややもすると教師の一方的な説明による、表面的な知識の伝達に陥る傾向があった。これを1つ目の背景にも照らし、具体的な活動・体験を重視する学習への転換を図ることが意図されている。

これからの背景に対応すべきものとして生活科が生まれてきたのである。このことをよく考えれば、自ずから、生活科の中で何が大切にされなくてはならないか、理解できよう。幼稚園とのスムーズな接続・関連はもちろん、子どもを理解し、その個々の育ちを大切にすること、そのために具体的体験や活動を重視することが、生活科を考える上で基本的に理解されなければなるまい。生活科の目標にも含まれる、直接体験の重視や一人ひとりを大切にするという姿勢は、もちろん、幼稚園教育の考え方と通じるものである。生活科で大切にされるべきことが、幼稚園教育で、すでに行われている。幼稚園で子どもたちがどのような生活を送り、保育者はどのような援助をおこなっているのか知ることは、生活科を理解し、授業を組立てる際に、大いに参考になるであろう。

## 2. 附属幼稚園での保育の記録と考察

### 事例1

平成元年5月29日(月)

子ウサギが生まれ、穴からでてくるようになったので、飼育小屋は毎日、興味をもってかかわってくる子でいっぱいである。この日も、年長児が保育者と一緒に飼育小屋の掃除をしているところに、年中児や年長児がたくさん集まってくる。友達と自転車を乗りきた年中児U男が、飼育小屋の前で立ち止まり、中の様子を見ていると、ニワ



トリが小屋から逃げ出し大騒ぎになる。まわりの子どもたちがニワトリを追いかけて小屋にもどすのについて、U男と友達のO男も飼育小屋の中に入る。U男はO男の後ろに寄添うような感じにいる。保育者や他の子がウサギにキャベツをやっているのを見て、U男も保育者のそばにきて同じようにやってみる。ウサギが食べるとうれしそうに笑って、「たべたー」と大きな声で保育者に言う。U男は保育者にむかって、「あそこにおるねえ」と穴の中のウサギを指差して言ったり、「黒いニワトリは毒があるんよ」とか「頭と足に毒があるから降ろさんようにせんといけんねえ」と言ったり、ウサギがキャベツを食べる音を聞いて、「ええ音じゃねえ」「面白いねえ」と言ったりする。保育者はU男のそばにいて、U男と一緒に喜んだり、話を聞いたり、うなずいたりする。

年長児のN子が「ウサギに食べさせる」と言って、裏庭からクローバーを摘んで持ってくる。U男はその様子を見ていたが、「ちょうだい」と言って、N子の持っているクローバーを2本取る。N子は「いいよ」と言う。U男はウサギにクローバーをやるが、ウサギが葉だけ食べて茎は食べないので、「茎は食べんねえ」と言う。隣で同じようにクローバーをやっていた年長児のE子が、「このウサギは茎食べるよ」と言うと、「不思議じゃねえ」と保育者に大きな声で言う。

それから、U男は次第に飼育小屋の中を動き回るようになり、ウサギの穴を見て、「この中にいますよ、なかなかでてこんよ」と年少児に言ったり、「さっき、こうやってすわっとったよ」と、保育者や同じクラスの子にウサギの格好をしてみせたり、高いところにたくさん集まったニワトリを見て、「うわー、ニワトリがいっぱいになっている、ニワ海賊だ」と叫んだりする。このようにしてU男は見たことや気付いたことを叫んだり、誰かれなく話したりして、10時頃から片付けの時間（10時45分）まで飼育小屋で過ごす。

## 事例2

同10月6日（金）

広い囲いをつくり、ウサギやニワトリを放すと、子どもたちが自然に集まってくる。U男とO男もその場へ行く。保育者が掌に餌をのせてニワトリに食べさせると、U男やO男など5、6人の子どもたちが様子を見にくる。U男は、「痛くないん？」と保育者に尋ねる。保育者が「だってこんなにかわいいちばしだもん、痛くないよ」と言うと、U男はしばらく見ていたが、「僕もやってみ



る」と言い、餌を掌にのせてニワトリに差し出す。ニワトリがつついて食べると、はじめはびくびくしているが、「うわあ、食べた、くすぐったい」ととても喜ぶ。その様子を見て、まわりにいた数人の子どもも掌に餌をのせてニワトリに差し出す。U男は、長い時間ニワトリと遊んだ後そばに置いてあった画用紙をとり、ニワトリの絵を2枚描く。

### 事例3

同11月17日（金）

登園後まもなく、O男とじゃれあっていたU男は、「そうだ、ウサギ小屋へ行こう、ねえO男君、ウサギ小屋行こう」とO男に言う。O男は「おー、行こうで」と言い、まわりの子どもたちに「ウサギ小屋行くひとー」と呼掛ける。U男、O男と仲の良い、同じ年中児のA男とH男が側に来る。

U男は、「ねえ、先生、ウサギ小屋行こう」と言う。保育者は他の子との約束があったので、「僕らだけでいってもいいんよ、行かれん？」と尋ねる。U男は「行かれん、先生来て」と言う。保育者が今度はO男に「自分達で行ってごらん」と言うと、O男が「行ってくる」と言い、U男たちはO男について自分達で飼育小屋に行く。

しばらくして、保育者が飼育小屋の方に行くと、U男とO男が飼育小屋の前にいる。U男が「先生、ウサギ小屋入ろう」と誘う。保育者は、2人が鍵を取ってきてあけるとところを見守り、一緒に中に入る。

U男とO男はニワトリを追ったり、餌をやったり、触ったりする。保育者がニワトリを抱くとU男は「僕も抱く」と言って抱く。次にO男が抱く。U男は「先生、今度あれ抱いてみて」と言い、保育者が抱くとU男も抱く。次にO男が抱く。保育者が大きなニワトリを「よしよし」と触れるとU男も「よしよし」と触り、「触れた」とうれしそうに言う。

保育者は20分位一緒にいて「先生、ちょっとお部屋に戻ってくるからね、あなたたちだけでもいられるでしょ」と言う。U男「また帰ってきて」と言う。保育者が「うん、くるよ」と言って小屋から出ると、U男は「せんせーい、すぐかえってきてよ」と大きな声で保育者に向かって叫ぶ。

その後、教生が飼育小屋に行き、U男とO男は、片付けまでずっと一緒に飼育小屋で過ごす。

### 事例4

同11月24日（金）

U男は、いつものように、「先生、ウサギ小屋行こう、一緒に行こう」と言う。同じ年中児のH男、T男、保育者が一緒に飼育小屋に行く。3人は「このニワトリがおとなしいんよね」、「抱きやすい」、「砂を蹴った」などと話しながら、抱いたり、餌をやったりする。

しばらくして、ニワトリを外にだして散歩させようということになる。保育者が「初めて散歩するからおとなしいのいいかもしれん」と言うと、U男が「このニワトリが一番おとなしいんよ」と白いニワトリを指さす。T男やH男も「そうよ、これが一番おとなしくてかわいい」と言う。

T男やH男が「にわちゃん」と呼んでいるので、保育者が「名前つけてあげんといけんねー」と言うと、U男は「しろちゃんよ」と教える。それから3人は、そのニワトリを外に出して歩かせ、



その後をついて歩く。

T男やH男は時々自転車に乗ったりするが、U男はずっとニワトリについている。片付けの時間になると3人でニワトリを飼育小屋に戻し、鍵をかける。

#### 事例5

同12月2日（土）

U男は、登園してシールを貼り、鞆をしまうと、O男に「ウサギ小屋に行こうか」と言う。O男は「うん、そうしよう」と言う。U男とO男は、保育者の側に来て、「先生、ウサギ小屋行ってくるね」と言う。保育者が「はいどうぞ、いってらっしゃい」と言うと、2人は走って鍵を取りにいき、自分達で鍵を開けて小屋に入る。2人は長時間飼育小屋で過ごし、片付けの時間になると自分達で鍵をかけ「ただいまー」と言って保育室に戻ってくる。



幼稚園には各々約10羽ずつのニワトリとウサギがいる飼育小屋がある。年長児が世話をしているが、だれでも好きなときに入って遊んだり、餌をやったりできる。自分の家からダイコンの葉やパンの耳をもってくる子もいる。ニワトリやウサギがいることは子どもたちにとって自然なことである。その、いつもある環境にかかわって、U男の活動は生みだされている。記録にしたがって、U男がニワトリ、ウサギに興味・関心をもっていく過程が読み取れるであろう。初めて、じっくりニワトリやウサギにかかわったU男は、そこでの自然な命とのふれあいによる新鮮な驚きや感動を、言葉や絵、行動によって表現している。また、誰かれなく話しかけることによって友達とのかかわりも生れている。

そのようなU男に対して、保育者は事例1においては、U男の発見や感動を受止め、共感しあっている。こうしてニワトリ等に興味をもったU男は、事例2でニワトリ等とかかわったことで、一層関心を高め、以後よく飼育小屋に通うようになる。保育者が、U男の関心がより高まるようにと、一緒に餌をやったり、抱いたりすることで、U男は怖くないと思ったり、自分も同じようにしたりしている。事例3・4では、飼育小屋で安心して遊びたいというU男の願いを受入れ、保育者は一緒に遊んだり、見守ったりしている。そうして、U男は自分達で飼育小屋に行き、鍵を開けて入って遊び、また鍵をかけてもどってくるようになる。

遊びの中で、自分と身近な自然、身近な生き物とふれあうことを通して、U男は自分なりに考えたり、発見したりしながら、その中で対象を命あるものとして見つめる目や、大切にしたいと思う心が育っている。そうして「生」というものを体全体で学びとっていくのである。

また、保育者の援助は、U男のその時々興味や関心、感動の対象を見つめたものでありそれがU男の育ちにつながっている。

#### 事例6

平成2年7月9日(月)

年長児I男が近所の人にもらったと言って持ってきたカミキリムシに、みなに興味を持ち園で飼うことになる。降園前に保育者は年長クラスの子どもたちに、I男が持って来たことや、数人で名前を調べたらゴマダラカミキリであったということを知らせる。飼い方についてはいろいろな子どもたちが調べてくると言う。また、生物の専門家であるW男の父親にも聞くといい、という意見もで、みなでW男に頼む。

#### 事例7

同7月10日(火)

W男がイチヂクの木を入れたらいいということを調べてくる。保育者とW男と一緒にイチヂクの木を取りにいき、飼育ケースにいれる。

降園前、保育者はW男が調べてきたことや、イチヂクの木を入れたことをみんなに知らせる。他の子も調べてきたことを言う。

#### 事例8

同7月11日(水)

水着を着替えたり、弁当の用意をしたりしている年中組の保育室の入口に、年長児U男(事例1～5のU男と同一)が何か考えている様子でじっと立っている。年中担任の保育者が「U男君どうしたの」と声をかけると、U男は棚に置いてあるカミキリムシの入った虫かごを指さして、「このカミキリ飼ってあげようか?」、「これはね、ゴマダラカミキリっていうぞ。ねえ、年長にもね、一匹カミキリがいるんよ。このカミキリも年長のところで一緒に飼おうか?」と大きな目でじっと保育者の顔を見ながら丁寧に言う。U男は保育者と一緒に、このカミキリを持って来た年中児に了解を得に行く。そして、虫かごをもってうれしそうに自分の保育室に帰る。

#### 事例9

同7月13日(金)

U男が年中組からもらってきたカミキリムシがいなくなる。そのことを知らなかった年中担任の保育者が、通りかかったU男に「カミキリムシは元気?」と聞く。U男は何も言わずに、下を向いてその場を去る。

降園前、年少担任の保育者が家から持ってきたカミキリムシを届けてくれる。子どもたちは大喜びで飼育ケースに移す。

#### 事例10

同7月24日(火) 合宿1日目

保育室で合宿の荷物の整理を済ませると、皆は遊戯室に行く。U男はひとり保育室に残り、年中担任の保育者に「あのカミキリムシは死んだよ、でも他のカミキリムシがいるよ」とぼつんと言い、急いで遊戯室に走って行く。

年中組のときにニワトリやウサギと存分にかかわったU男は小動物に大変な興味や関心をもっている。I男が持って来たカミキリムシであるが、U男と同じように小動物に興味をもっている子どもたちが中心となって図鑑で名前を調べる。保育者はこのことが他の子たちにも広がるようにとクラス全体の場で話す。翌日には、他の子が飼い方を調べてき、それも全体の場に出す。U男はこのときまでは、話を聞いているだけであったが、名前や飼い方を知り、カミキリムシに大きな興味や関心を抱く。自分も含めて、クラス全員で飼っている意識もある。そして、年中組の保育室で無造作に虫かごに入れてあるカミキリムシを見たとき、自分たちで飼いたい、自分たちなら飼えるという気持ちになり、年中担任に申し出る。どちらかという、控え目でおとなしいU男であるが、小動物に関係したことになる、このように積極的に人にかかわる姿を見せる。また、自分が飼ってあげるとひきうけたカミキリムシがいなくなったときに、年中担任に元気か、と聞かれU男は困って何も答えられなかったり、10日以上も前に聞かれたことを気にして、年中担任に聞かれもしないのに答えたりと、興味や関心のあることに対する意識が持続し、言動に連続性が見られるようになっている。

I男がたまたまもってきたカミキリムシであるが、初めから、全員で名前や飼い方を調べたり、触ったり、足の数を調べたりしなくとも、興味のある子がかかわっていく活動がひろがっていき、全員のものとなっていく。このように、日常生活の一部が遊びとしてひろがり、その中で学んでいる姿こそ、子どもの生活の一部と言えるのではないだろうか。

#### 事例11

平成元年10月18日（水）

近くの公園に木の実がたくさん落ちており、道路の並み木もとてもきれいな季節になったので、年長児2クラスと年中児1クラスで、弁当を持って散歩に出かけようということになる。何人かの子どもたちは、「どんぐりを拾う」、「きれいな葉っぱを集める」と言って、ビニール袋を持って行く。

公園に行く途中の溝に、栗のいがが落ちている。年長児K子「栗じゃー」と言ってそとと取る。「この中に入るとるんよね」と言って掌にのせて見る。「幼稚園に持って帰ってあけてみようよ」と保育者が言って持って来たビニール袋を渡すと、K子は栗を入れて持って歩く。

公園には、どんぐりがたくさん落ちている。子どもたちは、「どんぐりー」、「ここにたくさんあるよ」と大きな声で言いながら集め始める。そのうち、どんぐりを拾っていた年長児M子が「先生、これ何の実？」と保育者のところに少



し大きい実を持ってくる。保育者が、持ってきていた図鑑をひろげてM子を調べていると、まわりに他の子たちも集まってきて、自分の拾った実を出して「これは何」と聞く。子どもたちと



保育者は一緒に調べる。すると、M子が突然、カシとナラの実の写真を指して、「先生、発見、発見。こっちのどんぐりの帽子はぶつぶつで、こっちはしましまよ!」と大きな声で叫ぶ。保育者が「うわあ、大発見。これがナラの実でこっちがカシの実だって。Mちゃんどんぐり博士になれるよ」と言うと、M子はうれしそうに自分の拾ったどんぐりを出して、「これはカシ、こっちはナラ」と言いながらわかる。まわりで見ていた子が、「これは」とM子に尋ねる。M子は「これはカシ」、「これ、帽子があるとわかるんだけどなあ」などと丁寧に教える。弁当を食べた後、並み木道を通って幼稚園に向かう。道にはいろいろな色や形の葉がたくさん落ちている。年長児U子が、「先生、これウサギの耳みたい」と言って黄色で細長い葉を保育者に見せたり、赤

や黄色の葉を「きれいな葉っぱ」と言って持ってきたビニール袋に入れたりする。道のそばの葉のふきだまりでは、年中児E子が何度も自分の頭の上に葉を投げ上げる。年長児S男はやきいもをつくと行って(年長組は13日にいもほりをした)、持ってきた大きなビニール袋にそこらにある葉をかき集めて入れる。

幼稚園に帰ってくると、U子は「おし葉にする」と言って新聞紙に葉をはさむ。木の実をたくさん拾ってきたM子は、色紙で封筒を作ると、きれいな実をその中に入れ、「お母さんのおみやげにするの」と言って大切そうに鞆に入れる。栗を見つけたK子は保育者と一緒にいがをむき、小さな実を取り出す。「ぴかぴかできれいじゃね」と言い、ハンカチに包んで鞆に入れる。

## 事例12

同10月20日(金)

登園してすぐ、U子は画用紙をとり18日に拾ってきた葉で貼り絵を始める。のりで貼っているのだが、貼りにくそうな様子なので、保育者が「U子ちゃん、ポンドのほうがひっつきやすいよ」と言ってポンドをU子のところに持って行くと、「ポンドにしよ」と言って貼り始める。保育者も一緒にする。他にも4、5人の女兒がU子のまわりで同じように貼り絵を始める。U子はキツネやカニ



をつくっており、となりの子はウサギやクマをつくっているのを見て、保育者が「動物がいっぱいね、先生のは象さん」と言うと、U子は3枚の画用紙を見ながら、「動物園みたいだね」と言うとなりにいた子もにっこりしてうなずく。保育者が自分のつくった象の絵に動物園のように檻や



看板を書くと、U子は「先生、それ貸して」と言って保育者の絵をとり、自分の絵とつなげ、まんなか「いけだどうぶつえん」とかく。となりにいた子も「これもつけて」と言う。3枚の絵がつながる。すると、まわりにいた子たちも、「さるがいるよね、わたしつくる」、「わたしは鳥」、「券売るところもかかんにゃあ」といってそれぞれにつくりはじめる。U子はうれしそうにできてきたものを貼っていく。こうして押し葉の貼り絵の動物園は大きくなっていく。

### 事例13

同11月1日（水）

教育実習生とのお別れ会をかねて、鴻の峯に全員で登る。年長児のS男、やきいもをする葉を集めてくると言って、大きなごみ袋をもって来る。年長児T男、登る道々、どんぐりを拾ったり葉を拾ったりする。保育者がもっていたビニール袋をわたす。T男、「しいの実はたべられるんよ」と言って集め始める。K子、「こんなところ歩いとると、エルマーやらりゅうやらでてきそうじゃね」といいながら登り、「ダチョウシダがあった」といってはシダの葉を集める。年長児K男、やきいものたきぎにすると行って、小枝を拾う。もちきれなくなり、教生にもってもらうとまた集め始め、紙袋にいっぱい拾う。長い枝を保育者が足で踏んで折っているのを見て、K男も足で踏んで折り、袋の中に入れる。

S男、頂上で袋いっぱい葉を集め、袋をひきずりながら降りる。

### 事例14

同11月16日（木）

数日前から何度かやきいもの場ができ、多くの子がかかわっている。

この日も、登園するとすぐS男が保育者のところにやってきて、「先生、やきいもしようや」と言う。そばにいた年長児H子も「しよう、しよう」と言う。2人と保育者は外に出、やきいもの準備をはじめる。登園した子たちが次々にやってきて、「やきいもしたい」と言う。S男、H子、T男ら年長児が中心となって、落ち葉をもってきたり、小枝をもってきたりと用意をする。H子、いもを洗い、アルミホイルで包む。食べたいと言って場にきた年中児たちに「こうやってね、よくあらってからアルミホイルに包むんよ」と教える。食べたいと言って集まってきた子たちが、それぞれいもを洗い、アルミホイルに包んで、たきびに入れる。S男、たきびの火が弱くなると、落ち葉いれから葉をとってきて足す。

いもが焼けるのを待っている間、子どもたちは、まるたのいすにすわってたきびにあたっていたり、近くの固定遊具で遊んだりして待つ。ずっとたきびについていたS男、保育者に「そろそろかねえ」と聞く。保育者が「やわらかくなってきたかな」というと、S男は、持っていた小枝をいもに刺す。すっと通ると「もう焼けてるよ」と言い、まわりにいる子に、「焼けたよ、焼けたよ」と言う。子どもたちがたくさんやってきて食べる。

そのうち、いもは数少なくなる。年少児が食べたいと言って数人くる。S男「もう、あんまりないんよね、1つしかないけど分けてたべられる?」と言って、いもを年少児にわたす。T男、



「おいしいね、皮までたべられるよ」と言ってにこにこして食べる。H子、「先生食べた？これあげる」と保育者にいもをくれる。

火が消え、保育者は残火の始末をする。S男はがんぜきをもってきて、落ち葉の残りを集めて捨てる。H子「おいしかったね。寒いけど、たきびにあたるとあったかかったね」と保育者に言う。「ほんとうね、寒いときはやきいもがよく似合うね」と言うと、近くにいたS男「ほんと、おいしい」と言い、H子らと笑い合う。

子どもたちは幼稚園の中で、また外で、あちこちで感じた雰囲気や産物から、秋を実感していく。そして、大切に受止めた秋は、その後、多種多様な活動となって、長くかかわることになる。落ち葉で貼り絵をしながら色や手触りで感じたり、やきいもの材料を捜しながら、葉や小枝がたくさん落ちていることを実感したり、たきびの火で暖かさを、また空気の冷たさをも感じとっていく。

その中で、足で小枝を折ったり、たきびの火が燃尽きないように葉を足したり、風をおこして火力を強めたり、いもが焼けたことを小枝をさして確かめたりと、「生活上必要な技能」を身につけていっている。

子どもたち一人ひとりのしたいことや願いを受止め、子どもたちの思いが十分に発揮できる時間や場所を保障することにより、子どもは自然に自分からかかわっていき、その中でいろいろなことを学んでいく。秋を感じる対象物や活動が教師の枠組みで縛られてしまったり、既知のものから子どもの活動がはみださすことを許さないようなものではなく、子どもの思いを尊重しながら、柔軟に対応できる保育者の援助が、それを生みだしているのである。

### 3. 生活科実践のために

現在の幼稚園教育と小学校教育の間に悲しいことに大きな溝がある。もちろん幼稚園と小学校とは別の教育機関であるが、低学年は幼稚園の教育と接続するものとして、これまでとは別の観点からとらえなおすことが必要であろうし、どちらも子どもが十分に自分を発揮できる場でなければならないことは言うまでもないことである。

その溝を埋めるためにも、生活科が新設された。いくつかの小学校で生活科の授業を実際に見たが、保育者の立場から見るとそれらの生活科では溝は埋まっているとは言えない。

例えば「遊んで楽しさを感じることができる」ことをねらい、子どもが自由な活動をしているときの教師の指導の仕方である。教師は机間巡視をするように、子どもたちの間をまんべんなくまわり、活動の様子を見たり、声をかけたり、手伝ったりしている。教師が楽しそうに子どもと一緒に遊んでいるところなど、全くといっていいほど見られない。幼稚園では遊びそのものが子どもの生活であるので、保育者も一緒に遊ぶ。遊びながら共に喜び、驚き、感動し、その中で必要な指導をする。生活科においても、遊びそのものが目的であるときには、保育者と考え方は基本的に同じはずである。子

どもたちには「楽しさを感じる」ことをねらっているが、教師はその外から見ているだけでは、子どもの楽しさや思い、感動は共感できず、子どもを理解することも無理なのではないだろうか。しかし、事実は子どもの前に立って「教える」生活科、子どもたちが「先生のいうことをする」生活科が見られる。このような生活科はそれができた経緯から考えても妥当ではあるまい。

生活科の目標、内容、教材としてとりあげるものという面で考えるならば、確かに関連性はある。しかし、そのとりあげかたは、生活科になっているであろうか。いわゆる国語や算数と同じように、子どもの生活とは別のところで教材がもちこまれたならば生活科の意味はない。子どもの日常生活から生まれてきたものであること、子どもの学校生活の一部になっていること、また子どもの日常生活にかえることが、「生活の勉強」なのではないだろうか。時間の枠、教科の枠があるにしても、それ以外の学校生活の中にかかわっていれば、子どもの生活の一部にも入ってくるであろう。

幼稚園での遊びは子どもたちの生活そのものである。遊びの中で、社会事象、自然事象、友達とのかかわりなどを学んでいく。先の事例のように、保育者は、子どもたちが自然等に自分からかかわっていくときに、観察力を育てたり、科学的に考える態度を育成しようと何かを教えこんだり、何かをさせたりして、やっきになった援助をしているわけではない。しかし、結果としてそのような力や、動くものを見たときに興味をもって追っていくような気持ちが育っている。一人ひとりが環境とどうかかわるかを大切に、その極めて個別的、個性的なものの中で、保育者は何が育っているのか、どう育っていくのかを把握し、一人ひとりに応じた援助をした結果である。

生活科でも幼稚園での遊びと同じようなものを対象として学習することもあろう。それならば生活科を手がかりとして、子どもたちが幼稚園から小学校へ溝を感じずに、自分の足でスロープを登っていけるように教材の選び方、扱い方、指導方法、指導形態など、幼稚園での経験をよく知る必要があるし、幼稚園に学ぶべきものもあるであろう。このことは、生活科において、幼稚園の実践の真似をすることや幼稚園らしく実践することではない。幼児教育における子どもを中心とした考え方と実践を原理としてとらえ、学ぶことである。生活科を考えるには、まず幼児教育を知ること、これが初めの一歩ではないだろうか。